

「地理歴史防長唱歌」

～唱歌で学ぶ明治期の山口県～

専門研究員 山本明史

1 「地理歴史防長唱歌」が作られたころ

(1) 刊行年

- ① 「地理歴史防長唱歌 第1集」(明治34年[1901]) *山口県立山口図書館蔵
- ② 「地理歴史防長唱歌 第2集」(明治36年[1903]) *当館蔵(一般郷土史料 B379)
- ③ 「地理歴史防長唱歌 第3集」(完成?)

(2) 全国的な「郷土唱歌」作成ブーム

- ① 明治30～40年代を中心に、地理歴史教育の教材として、数多くの地域で「鉄道唱歌」や「郷土唱歌」が作成された。「地理歴史防長唱歌」は、そのような「郷土唱歌」の一つ。
- ② この時期の県づくりの動きと連動。
- ③ 長野県の「信濃の国」(『信濃唱歌 第一編』[明治34年刊]に収録)は、現在も県民歌としても歌い継がれている。
- ④ 「郷土唱歌」の例
 - 【明治23年】
三重県地理唱歌
 - 【明治33年】
大阪府管内地理歴史教育唱歌、京都地理唱歌、地理教育赤穂郡唱歌、地理教育東京唱歌第一編、地理教育東京唱歌第二編、地理歴史愛知県唱歌、地理歴史近江唱歌、地理歴史三重県唱歌、地理歴史教育甲斐唱歌、東京唱歌、広島県地理歴史管内唱歌上巻、広島県地理歴史管内唱歌下巻、地理教育埼玉唱歌
 - 【明治34年】
岐阜県地理唱歌、信濃唱歌 第一編、地理教育神奈川県唱歌、地理教育土佐唱歌、地理教育近江新唱歌、地理教育三浦郡回遊唱歌、地理歴史教育甲斐唱歌、兵庫県多紀郡郷土唱歌前編、兵庫県地理唱歌、北海道旅行唱歌、地理教育宮城県回遊唱歌、宮城県郷土唱歌、和歌山県周遊唱歌、**地理歴史防長唱歌第1集**
 - 【明治35年】
木會唱歌、福島県地理歴史唱歌、東京唱歌 完、富士唱歌
 - 【明治36年】
上田唱歌、郷土誌料小諸唱歌、**地理歴史防長唱歌第2集**
 - 【明治39年】
東京名所唱歌、地理歴史唱歌京都
 - 【明治40年】
福島県地理歴史唱歌
 - 【明治41年】
上田漫遊唱歌、地理歴史山形唱歌第一編村山地方、地理歴史山形唱歌第二編置賜地方、地理歴史山形唱歌第三編庄内地方、宮崎県地理唱歌、千葉県一周唱歌
 - 【明治42年】
地理歴史愛媛唱歌、名古屋唱歌

【明治 43 年】

愛知県唱歌、郷土唱歌吉備の光

【明治 44 年】

高松唱歌

(参考: 山口幸男「明治期における地理教育唱歌について」)

2 作詞者と作曲者

(1)【第 1 集】

- ・作詞 : 徳山中学校教諭 富田武一
- ・作曲 : 山口県師範学校教諭 大橋純二郎

(2)【第 2 集】

- ・作詞 : 徳山中学校教諭 富田武一
- ・作曲① : 静岡県師範学校教諭 大橋純二郎
- ・作曲② : 桜田高等小学校校長 浅田五一

3 構成

(1)【第 1 集】

- ・①防長 ②大島郡 ③玖珂郡 ④熊毛郡 ⑤都濃郡

(2)【第 2 集】

- ・⑥佐波郡 ⑦吉敷郡 ⑧厚狭郡 ⑨美祢郡

(3)【第 3 集】(完成?)

- ・⑩豊浦郡 ⑪大津郡 ⑫阿武郡 ⑬下関市

4 「唱歌」による学び ～唱歌とは？

- ・近代国家形成と唱歌
- ・さまざまな唱歌
- ・唱歌と童謡

5 「地理歴史防長唱歌」の特徴

- ・冒頭で県全体の概要を分かりやすく説明した後に、郡ごとに、各郡市の山川・港湾・島嶼・鉱山・温泉・名勝・古跡・神社仏閣・産物等の地理を説明。さらに歴史上の事蹟を網羅。
- ・各郡の特徴を、概ね 10～20 番前後の歌詞にコンパクトにまとめる(ただし一番長い吉敷郡は 33 番まである)。
- ・紀行文のスタイルで、県内を旅しているかのような臨場感が味わえる(移動には明治 34 年に下関まで開通した山陽鉄道を主に利用)。
- ・掛詞やリズムカルな口調を用いるなど、学習者を飽きさせない工夫がなされている。
- ・「一唱の中に知らず識らず防長の地理歴史を記憶することを得べし、以て唱歌教科書とすべく、以て郷土地理歴史参考書とすべく、又以て旅行案内とすべし」(『防長新聞』(明治 34 年 2 月 14 日)掲載の「防長唱歌」広告より) →「唱歌」を用いて知識を定着させる教授法の取り入れ。
- ・歌詞から、郷土が当時どのように理解されていたのかを読み取ることができる。

[参考文献]

山口幸男「明治期における地理教育唱歌について」(「新地理」41-4/1994 年 3 月)

山崎一郎「地理歴史防長唱歌(明治 34・36 年)」(平成 30 年度第 13 回中国四国地区アーカイブズウィーク 山口県文書館展示解説シート/2018 年 6 月)

拙稿 「唱歌・音楽の教科書」(平成 30 年度第 13 回中国四国地区アーカイブズウィーク 山口県文書館展示解説シート/2018 年 6 月)

地理歴史防長唱歌

第二集 佐波ノ古

富田 武一 著

第六 佐波郡

娑磨娑麼娑婆とんちんちんちんちん

古書みえあきと今ハ佐波

景行 仲哀 兩帝の

行幸のゆりゝ郡がひ

景行天皇 仲哀天皇

佐波ノ古

第2集 「第六 佐波郡」(冒頭部分)

大橋純二郎作曲

0 5.5 | 1. 2 | 3 2 1 3 | 5 1 2 | 3. 1 2

(一) ヤマ ドー ジマネノ ニーシ ノカタ
(二) ひがしー げひし せーき しゆの
(三) クダラー シホフク ニーホ ンカイ

0 5.5 | 5. 3 | 2 1 6 1 | 3 2 1 | 6 1 2

サン ヨー ドーノー ハーダ テナル
さか ひを なーせる きーん みやくは
ナミタ チ サワゲ ヒービ キナダ

0 6.6 | 6. 5 | 6 1 3 1 | 2 3 2 | 1. 3 5

スー ホー ナガトノ フーク クニノ
ヤヘ ガ きなーして ひーき かの
キタ ト ニ シーフトーリ マキテ

0 5.5 | 6. 5 | 3 1 6 1 | 3 2 1 | 2. 3 1

ソノ ク ニ ガター チーヲ シサヨ
くも のに たかー そーび えたり
ミナ ミ ハーホー ナーダ ヅカシ

第1集 大橋純二郎作曲 (楽譜)

大橋純二郎作曲

1 | 1 1 6 | 5 5 5 3 | 1 6 5 3 | 5 0 |

サマサマ サバト サマサマ ニ
はくぶの むーらはつのぐんの

6 | 6 6 1 | 2 3 2 1 | 3 2 1 3 | 5 0 |

コシニハ アーレド イマハサバ
まへやましーろにつらふりて

3 | 5 5 3 | 3 2 1 2 | 3 3 2 1 | 6 0 |

ケイコー チュアイ リョーテイノ
むかしは ぞくぢさいひしなを

1 | 2 2 3 | 5 6 5 3 2 | 1 3 2 7 | 1 0 |

ミユキノ アーリシ グンヅカシ
すきだす かみーにつたへたり

第2集 大橋純二郎作曲 (楽譜)

浅田五一作曲

5.5 1.1 | 2.2 5.5 | 3.3 1.3 | 2. 0 |

サマサマ サバト サマサマ ニ
はくぶの むーらはつのぐんの

3.3 3.3 | 2.2 1.1 | 2.3 2.1 | 6. 0 |

コシニハ アーレド イマハサバ
まへやましーろにつらふりて

5.5 6.6 | 5.5 1.1 | 2.2 3.3 | 5. 0 |

ケイコー チュアイ リョーテイノ
むかしは ぞくぢさいひしなを

6.6 5.5 | 3.3 1.1 | 2.5 3.2 | 1 0 |

ミユキノ アーリシ グンヅカシ
すきだす かみーにつたへたり

第2集 浅田五一作曲 (楽譜)

地理歴史防長唱歌 第一集

第二防長

- 一 大和島根の西の方
山陽道のはたてなる
周防長門の二国たぐくにの
その地勢の雄々しきよ
- 二 東芸州石州の
境をなせる山脈は
八重垣なして久方の
雲井に高く聳えたり
- 三 鯨潮ふく日本海
波立ちさわく響灘
北と西とを取りまきて
南は周防の灘ぞかし
- 四 東西三十九里余
南北三十里あまりにて
面積三百八十有
五方里ごほりばかりなりとかや
- 五 北部もさのみ寒からず
南部も甚だ暑からず
天変地異は多からず
瘠せたる土地は少なくて

六 狭田長田さだながたに作る稲

中国米とむかしより
その名高きに改良を
加へて魚塩ぎょえんに富める国

七 海には汽船陸に汽車
運送交通便利にて

同じ日本帝国の
うちにも多くはあらざらん

八 かかる幸福うくるわが

九十九万の同胞よ
君に国にと各の
業をばはげみ勉めよや

第二大島郡

一 わが帝国の旧号は

今も伝はる大八洲
その一洲の大島の
洲はすなはちこの郡

二 郡に名高き嘉納山

登りて見れば島々は
星の如くに列なりて
雲かとまがふ伊予の山

三 北に賑ふ久賀港

四境の役の筒音に
うちかはりてもきこゆなり
里の女が織る機の

四 南の湾は安下庄

過ぎし庚子の十月に
東宮殿下ののりませる
軍艦千歳の碇泊地

五 千歳栄ゆる小松村

その松風も声そへて
鳴る潮騒はこの島の
名をば負ひもつ瀬戸ぞかし

六 瀬戸のかひある大御代おのみよに

生まれしことをよろこびて
玉藻刈るてふ海人の子も
学の海にあさるなり

七 水産多き浦々を

うら面白く思うどち
夏期休業に遊ばゞや
商船学校さへあれば

第三玖珂郡

一 元正帝の大御代に

熊毛を割きて置かれたる
玖珂の郡はことさらに
山高くして水長し

二 北の境の寂地山

直立四千四百尺
高きのみかは良材を
出だすも県下第一よ

三 その外小五郎大将陣

鬼ヶ城山羅漢山
木谷水尾秘密ヶ岳
いづれも三千有余尺

四 四境の役に幕軍の

渡りかねたる小瀬の川
川のそなたは安芸にして
大竹川といふとかや

五 国境より二里あまりくにがみ

岩国町はこなたにて
横山村とさしむかひ
吉川氏の旧城下

六 吉川氏の先霊を

いつきまつれる吉香社
弥生の春は桜花
たゞ白雲とたなびけり

七 白山比咩しろやまひめは三柱みはしらの

神をまつりて鎮座より
千年あまりになりぬとか
その格同じく県社なり

八 町と村とのそのなかを

流れてくだる錦川
渡せる橋は巧妙を
尽しつくせる錦帯橋

九 川のほとりにならびたる
高きいらかは義濟堂
織り出す縮製の生糸
いと盛なる工場よ

〇 町の東の室木の
村人村本三五郎
綿をばつくることはじめ
多くの利益を残したり

二 手向よくせよあらかきその
道と詠めし岩国の
山をばよけて今は汽車
西に東に通ふなり

三 百船泊つる新湊
あとに見なして西の方
藤生由宇駅すぎぬれば
神代村のステーション

三 ここよりおよそ十余丁
のぼれば岩尾の瀑布あり
土もさくてふ夏の日は
暑をあらふ人おほし

四 次なる駅は大島
鳴門の音にきこえたる
海防僧の遺跡を見て
行けば程なく柳井町

五 海岸筋の要路にて
汽車に汽船に乗る人の
名産なりと聞きつたへ
求むる醤油木綿縮

六 北に向ひて四里あまり
入れば高森玖珂二村
鞍掛蓮華の城址も
二井寺山も遠からず

七 欽明寺峠道祖峠
こゆればやがて関戸村
蚊帳織る業はゆきかよふ
人の目をこそとゞめけれ

八 眺望いとよき弥山をば
左にさして西北に
入れば本郷広瀬道
この辺むかしの山代よ

九 楮を植ふし祖なりとて
まつる中内右馬之允
たてし功は残りなん
千代万代の末までも

第四熊毛郡
一 熊毛の名義知られねど
熊毛といへる式内の
社のあればゆゑよしの
ありげにこそは思はるれ

二 北部は地勢さかしくて
烏帽子ヶ岳ぞいと高き
東南、海にさし出たる
室津半島ほそ長し

三 長島前によこたはり
その東端は上の関
かまどの瀬戸の海人小舟
水棹もとゞく室津港

四 その後なる大座山
のぼりて見れば面白し
大島玖珂の浦かけて
沖の島々たゞ一目

五 千葉ヶ崎による浪の
かへすがへすも家人は
かへり早こと旅人を
いはひまつらん祝島

六 佐合牛島馬島や
馬島人は朝鮮に
ゆきかよひしてさゝやかの
島にはあれど家富めり

七 陸地は平生海てには
塩やく煙たなびきて
里には木綿おりいだす
機音しげくきこゆなり

八 堅ヶ濱へて処女等が
績むてふ麻郷まりふ浦
千坊山を右にして
行けば室積普賢寺

九 普賢の生身をがめりと
いふ性空の石碑あり
さゝら波たつ海見つゝ
光井すぐれば島田村

十 島田駅より東に
進めば岩田布施駅
行く手に見ゆる石城山
式内石城ノ神社あり

十一 中国道は今市や
呼坂などの駅ありて
呼坂村のその西は
都濃の郡の久保村ぞ

第五都濃郡

一 都濃の郡はあがりての
世の史に見る都怒の国
北部は山々重なりて
前山代と呼ばれけり

二 中にも高く聳ゆるは
蘇ヶ岳に見見山
岩国川の水源は
こゝよりいでゝ二十余里

- 三 その水上の大潮の
村に隣れる鹿野村は
海面よりも高さこと
一千二百有余尺
- 四 紙をすき出し茶を製し
アンチモニーも採掘し
このあたりなる都会にて
漢陽禪寺は旧刹よ
- 五 承応三年岩崎氏
寺の後の山うがち
洞をつくりて洪川の
流をこゝにわかちたり
- 六 隣の村は大向
式内二俣神社あり
南にむかへば長穂村
龍文寺てふ巨刹あり
- 七 東南に向へば須々万村
白砂川や沼の城
わが毛利氏を陶の兵
防ぎて敗れし古戦場
- 八 山路をたどり下谷や
瀬戸の次なる花岡の
里に製する白味噌は
名にこそ負へれ卯の花と

- 九 こゝの八幡の宮の塔
数百年のものとかや
なほも南に下松は
星の天降りしところとか
- 一〇 社にまうで妙見の
堂にまうづと翁媪
汽車より下りて杖につく
蝙蝠ならぬ笠戸湾
- 二 笠戸の島を左手に
さしていそげば楡ヶ濱
鏡の山にまつりたる
遠石の宮は遠からず
- 三 国に尽し、健士等と
孝女米との石碑に
そゞ涙もかわかぬに
はやも徳山ステーション
- 三 国道海岸汽車道の
三つの出であふところにて
こゝの大根は大方に
もてはやされて名ぞ高き
- 四 そびらに城山おもてには
大島半島大津島
黒髪仙島つらなりて
大船泊つる良き港

- 五 ながめもたぐひ那智ノ宮
新宮熊野のそれならぬ
鼓の浦をうち見れば
浪のひゞきも面白し
- 六 西は富田村おくまりて
四熊ヶ岳ぞ聳えたる
福川夜市の両村に
跨がる若山は陶が城
- 七 陶器つくる戸田の里
すぐればやがて椿峠
こゝぞ郡界汽車道は
山の陽の濱手ぞや
- 二 北部の村ハ都濃郡の
前山代につらなりて
昔ハ徳地といひし名を
漉き出す紙に伝へたり

地理歴史防長唱歌 第二集

- 第六佐波郡
- 一 娑磨娑磨娑婆とさまさまに
古書にはあれど今ハ佐波
景行仲哀両帝の
行幸のありし郡ぞかし
- 二 山ハ日暮石ヶ岳
真多ヶ岳など聳え立ち
水ハ名に負ふ佐波の川
大海の湾にぞ注ぐなる
- 三 流にのぞめる堀村に
二ノ宮出雲おはしまし
その川下の岸見にぞ
三坂の神はおはすなる
- 四 都濃より来れば国道も
鉄道線路も入海の
富海の駅はそれのみか
船さへつどふところなり
- 五 鉄道線路は三田尻を
経て吉敷郡大道に
ただちにいたれどわれわれハ
歩行にて探らん名所を
- 六 富海をあとに末田すぎ
牟礼の村なる阿弥陀寺に
文治の昔の国の守
俊乗坊の蹟とはん
- 七 東佐波令国衙てふ
里は国府の址にして
八丁究竟の碑に
昔のさまぞしのぼるる
- 八

九 くれれば程なく国分寺
今なほ魏々たる構なり
しばらくここにやすらひて
宮市町に入りたちぬ

一〇 酒垂山を背におへる
南おもての松ヶ崎
ここに祀れる菅公の
遺徳は千代も万代も

二 馨る麓の梅林
わけて上れば松青く
玉より白き砂山
その見はらしの面白さ

三 近きは三田尻向島
港を出でて行く船を
見送る遠にただなはる
山ハ豊前か豊後地か

三 左ハ江泊右手こそ
中の関また西乃浦
塩やく煙たちみちて
民のかまども賑へり

四 山を下りて西の方
佐波の川なる大橋を
渡りて下る川ぞひの
道はすなはち中国路

一五 行く手の右に見る森は
これ本国の一ノ宮
いつける神はやさかの
曲玉つくれる玉祖

一六 程遠からぬ佐野の里
その佐野焼のハじまりハ
神功皇后摂政の
辛巳の年のころとかや

一七 一百数十年前に
製塩事業に身を委ね
長く功をのこせるハ
ここに生れし田中氏よ

一八 大橋にまたたちかへり
北に向ひて進みゆく
道のかたへの剣社に
治まる御代をことほがん

一九 奇岩怪石むら立てる
右田ヶ岳を右にして
山続くなる鯖山の
洞道いづれは吉敷郡

第七吉敷郡
一 郡界なる鯖山を
下れば小鯖の禅昌寺
昔は西国の高野とて
今もその名ぞいと高き

二 音にきこえて鳴瀧の
泰雲寺にもたち寄りて
くれば氷上の橋近き
山手に見ゆる興隆寺

三 大内氏の氏寺と
栄えしかども名にも似ず
衰へ果て、本堂の
跡は山口農学校

四 御堀の里の外郎羹
名産なればあがなひて
鰐石見つゝ鰐石橋
渡れば山口町ぞかし

五 山口ハもと山口と
いふ豪族のすめりしを
大内弘世ほろぼして
基開きしあところ

六 九代の孫の義隆卿
防長豊筑芸備石
七ヶ国を管領し
西国一の大都会

七 その館址の古寺の
庭にのこれる豊後石
苔の筵の露ふみて
誰かむかしをしき忍ぶ

八 築山館のその跡は
築山人坂の社にて
夏のみ山と見し梢
海と見し池かたもなし

九 將軍足利義植の
滞在ありし御屋敷と
いふ地は歩兵第四十
二聯隊の兵営よ

一〇 営所の東に三ノ宮
その大庭の糸桜
さきのさかりのそのころは
人の心をつなぐらん

二 北にハ平野の常栄寺
山路たどりて詣てばや
雪舟禪師のきつきたる
名高き庭もあるなれば

三 西にハ七ツ尾八幡山
八幡は大内政弘卿
四百年前産土の
神とまつれる宮居なり

三 七ツ尾山のふもとなる
別格官幣豊菜社
まつれる神ハ旧藩祖
大江ノ朝臣元就卿

- 四 その瑞垣みづかきにつゞきたる
野田の社ハ県社にて
維新の元勳敬親卿
元徳卿をまつりたり
- 五 歩うつせば毛利邸
往むかにし明治の十八年
聖駕巡幸せいがじゆんぐんありし時
駐驛ちゆうえきあらせたまひけり
- 六 雪舟禅師の旧跡の
雲谷庵にやすらひて
五重の塔を見とめつゝ
行けば薬師の琉璃光寺
- 七 寺の南の香山に
忠正忠愛両公の
墓かぶならびてその前は
眺望たうぼうもひろき公園ぞ
- 八 はるかに仁保の山かけて
蕎麦ヶ岳また粟ヶ岳
飯山などもたゞ一目
山口町ハいふもさら
- 九 こゝを下りて右に折れ
行けば県庁これはもと
萩の城より旧藩主
うつりすまれし館なり

- 二〇 仰たかげば高峯たかね太神宮
その奥山の石垣は
これぞ大内義長が
弘治に築きし城のあと
- 二一 東にはなれて万代と
人のたゞふる龜山に
忠正公と支藩主の
銅の像ぞたちませる
- 二二 麓に高等学校や
師範学校中学校
中学校ハこの外に
岩国徳山萩豊浦
- 二三 探りてなほも見まほしき
社に寺に古戦場
製造品も多けれど
いそぐ旅路ぞ口惜しき
- 二四 右に方便左手に
姫山見つゝ袖付の
橋を渡れば湯田の町
女学校にもたち寄らん
- 二五 湯田の温泉にゆあみして
吉敷村なる四ノ宮に
まゐりて鼓の瀧も見ん
遠くもあらぬ道なれば

- 二六 平川村の平清水
八幡宮は県内に
またたぐひなき古建築
千年以前の物とかや
- 二七 五ノ宮朝田の神のます
大歳村の川ぞひの
道をくだれば小郡よ
こゝに小郡ステーション
- 二八 まだわれわれが行く先は
はるけき道の程なれど
汽車のかよへることなれば
見て来ん東の村々を
- 二九 藍と綿とにかねてきく
名田島村を右にして
陶鑄銭司をすぎぬれば
はやも大道駅にきぬ
- 三〇 こゝより下りて岩淵に
孝女阿石あかしのあとを訪ひ
めぐる堤の長沢の
池のけしきもながめけり
- 三一 大村卿の神道碑
松永翁の功業碑
読み見ん人は国のため
つくす心をおこすべし

- 三二 また小郡にかへりきて
乗れば車は嘉川すぎ
阿知須をすぎて西をさし
山のあひにぞ入りにける
- 三三 床波岐波の浦々も
その崎々に寄る浪の
かへすがへすも見たけれど
またの旅路にめぐりなん
- 第八厚狭郡**
- 一 野ゆき山ゆき川わたる
いたづき知らぬ汽車の旅
かはる景色をながめつゝ
長門の国にハ入りにけり
- 二 一声高き笛の音に
車はつきぬ船木駅
こゝより下りて郡内の
名所さぐるもよし見村
- 三 村の南の厚東川
そなたに見えて峙つは
霜降山と名も高き
厚東氏の城の址
- 四 川をわたりて行くさきの
宇部にあるなり本県下
最大一の常磐池
水面一百町ばかり

五 石炭つみ出す新川の
脈を見て藤山や
厚南などの村々を
すぐれば須恵の小野田港

六 セメント会社硫酸の
会社もその名高千穂の
炭田などもさぐりつゝ
くれば程なく船木村

七 こゝの町にてつくる櫛
隣れる厚狭の市に掘る
硯の石は名産と
もてはやさるゝものぞかし

八 厚狭川渡り殖生峠を
こければやがて殖生の村
糸根の濱の松原は
長門舞子の名ありとか

九 奇兵隊長高杉氏
東行ぬしの墓は
王喜村なる木屋川の
その川上の吉田村

一〇 いざや詣でん君のため
国のためにと身を忘れ
心つくしてたてにける
功を誰かしたはざる

二 更に東にたちかへり
見ばや船木にその基
ひらきし夫人ときの名を
名にしもおへる女学校

三 万倉にいでゝ吉部村の
音にきこゆる荒瀧の
内藤氏の城址
さぐりてみねに入りたゝん

第九美祢郡
一 防長二国のわが県は
一市十一郡にして
海にそはぬハこの郡
さればみねとや名おひけん

二 連なる峯の中にしも
ことさら高き雁飛山
桂木花尾桜山
鯨ヶ岳に方便山

三 権現山の南なる
大田の村の大田川
川にそひたるみあらかハ
名もうるハしき金麗社

四 恭順党を討たんとて
奇兵隊士等この神に
祈りてたちしそのかみの
さまこそ更に忍ばるれ

五 北に向ひて二里ばかり
杖ひきゆけば絵堂町
苦戦の結局隊士等が
かちどきあげしはこの処

六 こゝより程も遠からぬ
景清穴も秋吉の
台の麓の瀧穴も
いとめづらしきものぞかし

七 上のふたつの洞穴に
共和村なる弁天の
池をあはせて郡内の
三絶景といふとかや

八 秋吉台やその外の
村に堀り出す無煙炭
石灰石に大理石
これぞ宝の無尽蔵

九 伊佐の里なる南原寺
古刹ときけばたちよりて
東と西との厚保をすぎ
吉田の里にかへりきぬ

(終)